

## デジタル技術の可能性と未来

徐敬浩

1999年の春、韓国は2年前の1997年11月から始まった外貨の危機から抜け出すために必死に努力していた。政府は、内需を拡大し、また働き口を創り出すために新たな成長動力を探していた。特に、長期間の投資を必要としない、急速成長をさせることのできる動力を発掘することが最も重要であった。この過程の中で、情報通信技術（Information Technology）を適用した新たな産業分野を育成する方針が決められた。政府は新技術の開発や適用範囲を画定し、そこに大規模の予算を投入した。相当に冒険的な試みだったが、結果的にこの政策は、韓国が予想以上に速く外貨の危機から抜け出すことに寄与したところが非常に大きい。

この政策で注目すべきことは、情報通信技術の適用対象に歴史的資料の電算化（電子化）が含まれていた点である。政府は、1999年末から1,000万ドル以上の予算を史料の電子化作業に割り当てており、その後10年間にわたって同じ金額の予算を持続的に支援することにした。当時、外貨不足に悩んだ韓国の状況を考えると、これは非常に大胆な試みであった。言い換えれば、これは二兎を追う計画だった。一方では史料の電子化を通じて人文学の復興を企てており、もう一方では膨大な資料の電子化を通して、多くの働き口を創出しようとする計算が底に敷かれていた。

歴史資料の電子化作業は、2000年8月から公式的に始まった。歴史的に価値の高い韓国学資料を所蔵しているソウル大学の奎章閣（ギョジャンガク）と韓国精神文化研究院（現・韓国学中央研究院）、大韓民国国史編纂委員会、民族文化推進会議、この四つの機関が共同で事業団を構成し、「韓国歴史情報通合システム」というインターネットサイト（[www.koreanhistory.or.kr](http://www.koreanhistory.or.kr)）を構築する作業を開始した。各機関が、所蔵資料を選別して電子化する対象を決定し、その資料に対して解題作業を進めた。さらに、選定された民間の業者がデジタル資料のデータベースを構築する作業を担当した。政府機関である韓国電算院が技術の監督を行った。

この作業は8年間続いており、政府や学界、そして産業界が共同で進めた事業の模範になった。全体的に見ると、6,000万ドル以上の予算が投入されたこの事業の結果物は、単純な数値で要約することには無理がある。電子化の対象は古書、古文書、木版、地図、新聞資料、学術論門などを包括した。それは、韓国における歴史資料の相当の部分（私は30%以上だと思っている）をインターネットで検索して原文を読み、情報と知識を把握することが可能な総合システムとして作動している。

歴史資料の電子化の中で、最も核心的な目標は保存と活用であった。この作業は、当時の韓国では非常に新しいものとして認識されたが、実はそうではなかった。1997年に活動を開始したユネスコ世界記憶遺産国際諮問委員会は、世界記憶遺産事業の目標を保存とアクセ

ス (preservation and access) として設定したことがあったが、ここでアクセスは活用と同じ意味を持っていた。2000年当時の韓国では、民間の業者が政府から部分的に支援を受けて『朝鮮王朝実録』の電子化作業を完成しつつあり、中国においても『四庫全書』の電子化作業が進行中であった。視野をより広げてみると、歴史資料の電子化作業が21世紀の専有物ではないということを見出すことができるだろう。今から遠くない過去を見ても、まず1920年代に日本で出版された『国訳漢文大成』があり、さらに遡ると、『四庫全書』『永楽大典』そして『太平御覧』のような、大規模の類書の刊行が行われていた。つまり、この電子化作業とは、同じ領域で方法を異にする21世紀的な表現にすぎない。多くの人々が、デジタル時代の到来は過去との断絶を招くと主張しているが、まだそのような兆候は見えてこない。つまり、デジタル時代にも表現と伝達手段の差があるだけで、過去と現在は保存と活用という文脈で繋がっている。

デジタル時代にも、人間の知的活動の基本モデルは変わらなかった。人々は、情報を収集して知識を創出しており、知識を活用して思惟を形成する。以前には、この三つの領域が明らかに区分されていなかったが、デジタル技術が拡散するにつれて、これらの領域がより明確に区分される傾向が現れ始めている。デジタル技術が最も大きな影響を与えた領域は情報の収集である。この技術は、長い間蓄積されてきた技術を一気に市場に並べる役割を果たした。例えば、一箇所の図書館が数十万巻の蔵書を獲得するまでに100年かかったとしたら、デジタル技術はその数十万巻をたった数年間の作業を通じて一気に並べられるようになった。特に、検索技術が発達することによって、情報収集方法が投網式の捕獲からついに標的型の獲得に変わった。これは、知識創出の面でも新たな可能性を示している。韓国では、歴史資料の電子化が本格的に行われて以降、情報の収集ではなく、収集された情報の加工が人文学の話題になった。古代から近代に至るまで、知られていなかった事実が続々にあらわになったり、またすでに知られている事実の再解釈も活発に展開されている。ソウル大学を退任した許成道 (ホソンド) 教授は、三国時代の記録から、新羅時代に立てられた天文台=瞻星臺 (チョムソンデェ) を築造するとき、方程式と三角関数の理論が用いられていたことを明らかにしたことがある。また、韓国科学技術大学 (KAIST) の全峰寛 (チョンボングァン) 教授は、韓国の19世紀の開花期から1945年の解放に至る時期までの社会的現象を生々しく再現している。このような研究作業の場合、以前は膨大な資料をいちいち調べなければならない負担があったため、なかなか推し進めようとしなかったが、これは電子化によって資料にアクセスしやすくなったために実現した研究成果だと言えるだろう。また、韓国では朝鮮時代の名将として知られる李舜臣 (リ・スンシン) を主人公にした映画『鳴梁』 (ミョンリャン海戦) には、2,000万人余の観客が押し寄せた。このように大ヒットした歴史劇を構成するときにも、電子資料が非常に大きな役割を果たした。つまり、電子資料は該当分野の学者のみならず、知的生産に従事する全ての人々に多大な影響を与えている。

しかし、全てのことには明暗がある、デジタル時代が常に明るいわけではない。私は何年か前、九州大学が新しく建てた図書館を訪問したことがある。この図書館には、最先端の設備は整っていたが、書架がなかった。全ての書籍は地下の書庫に無秩序に置いてあり、閲覧者がコンピューターで検索した書籍を申請すると、ロボットがその書籍を探し出し、貸し出

してくれるシステムであった。この図書館は、書架を置く空間を節約し、さらに、狭い書架の間を行き来しながら、また小さい請求記号を確認しなければならないその煩わしさを軽減させるシステムを誇っていた。しかし、この先端施設には失われたものもある。例えば、書架の間を回りながら興味が湧く書物を偶然に発見する喜び、そして本の香りを嗅ぎながら思索を楽しむ余裕などは、この図書館では享受できなくなったのである。つまり、最先端を誇るこの図書館では、ロボットが取ってきた書物を通じて必要な情報と知識を確保することは可能だが、自ら知識を創出して思惟にまで連繋させる雰囲気は提供してなかった。もし、これが未来の図書館だとしたら、それはおそらく情報やすでに加工された知識の一方的な通行のみを提供していた。双方向の交換は絶対無理だと思った。そして、このように考えると、デジタル技術が情報の提供に大きな利便性を与えているが、能動的な知識の創出やそれを通じた思惟の形成においては、その影響が限られたものにしかならないと思われる。

デジタル時代の明暗は読書の領域でも現れている。Google、Amazon等で発売されている電子書籍とスマートフォンを通じた電子テキストの拡散は、読書の形態に革新的な変化をもたらしている。青少年と成人を対象とした漫画は、大多数がデジタル化したファイルやインターネットサイトを通じて流通されている。文学作品の流通にもデジタル技術が適用されている。インターネット上の小説サイトである「文피아」 ([www.munpia.com](http://www.munpia.com)) には、1日にアクセスする人が数万人に達している。このサイトはアマチュア小説家たちの作品を連載しており、スマートフォンで読む読者もかなりいるそうである。このような傾向を見て、一部では紙の本の終末を予言している。少し早急な予言に思われるところもあるが、読者層の変化と、それに伴う読書スタイルの変化が起きていることは否めない。

デジタル時代の属性は、Facebook、Twitter、Instagramという三種類のSNSに現れた変化をみれば把握することができる。一番早く出現したFacebookは長いテキストを掲示することができた。その次に出現したTwitterに掲示できるテキストの量は大きく減っており、短いテキストの掲示が長文の掲示を圧倒する傾向を見せた。その次のInstagramはテキストが最小化し、イメージと映像が掲示物の大半を占めている。批評家たちはこれまでの変化を見て、人々がだんだん瞬間的な感覚を重視する一方、テキストからどんどん離れていく傾向を見せていると批判している。しかし、これは一つの流れであり、それが読書の世界でも現実として現れている。前述した「文피아」に掲載された小説はほとんどが一回切りの消費財の性格を持っている。一回読んだところにまた戻ることがそんなに多くないという。読者たちはアマゾンとグーグルが提供する電子書籍に対しても同じような態度を取る可能性がある。デジタル時代における読書は、知識を吸収し、それを反芻して、思惟の形成へ繋げる過程ではなく、情報と知識を吸収し、それをすぐに忘れる過程へ流れていると思われる。

おそらく当分の間は、電子書籍（インターネットサイトのコンテンツを含めて）と紙の本が、一方では競争しながら、もう一方では共存する可能性が高い。例えば、この間までは外国語の教材には必ずと言っていいくらいCDが付いていた。これと似たような形のものが詩集に適用されうる。購入した詩集の固有番号をインターネットのサイトに入力すると、詩人が朗読する声と作品の背景に関する説明を音声で聞くことができ、また作品の中で描写されている風景画をスライドで見られることもできる。このようになると、詩集は以前の詩集では

なく、より包括的な伝達手段に変身する。音声ファイルとイメージスライド、あるいは動画が合わせられて一つの出版物になる。だからといって、すべての出版物でこのようなことが可能になるわけではない。長編小説をこのような形で出版するのは無理だろうし、学術書籍は共存の可能性が一層低いだろう。言い換えれば、これはデジタル技術が浸透し難い出版分野が存在することを意味する。これはデジタル技術と伝統的な出版の方式が役割分担という形で共存する可能性を示している。

各種の機器の普及や新技術に対する関心のおかげで、これから電子書籍は拡散するよう見えており、紙の本の需要が暫定的に萎縮する可能性は十分にある。だが、紙の本が消えてしまったというのは性急な予断ではないだろうか。読書は多様な領域で行われている。断片的な情報や知識を求める読者の場合は使いやすい電子書籍をより好むかもしれないが、思惟の形成を図る読者はそうではない可能性が高い。このような理由で、電子書籍と紙の本の間で領域の役割分担が発生する可能性もある。このような推測は、東アジア社会特有の書籍に対してより格別な態度を顧慮してみるとより現実性が高いと思われる。

純文学と学術分野は、デジタル技術が浸透できない分野として残るのではないかと思われる。グーグルとアマゾンには、このような分野でも電子書籍が紙の本を追い出す可能性があるとは私はみている。ところが、東アジアの伝統を考えると、そのような可能性がこの地域で同じく起こる可能性は相対的に低いと思われる。東アジアの社会では、昔から読書人を尊敬しており、書籍の保有に対して特別な意味を与えてきた。書籍はただ単に知識を吸収するための消耗品ではなかった。それは読書人のアイデンティティーを確保すると同時に、社会的地位を決定付ける象徴であった。読書は、知的思惟とその結果物である詩文の作成を通じて、社会的地位を獲得するために、基礎的・必須的過程であった。そして、書籍は単純に読むだけでなく、保有することにこそ価値を発揮する。次のようなエピソードがある。中国の蘇州で、結婚もせず一生貧乏に暮らしていた靴直しが寂しく世を去った後、彼の家から数千巻の本が発見されたことがあった。隣人たちは靴直しが持っていた書籍に対する敬慕を賞賛し、歴代の有名な文人たちが眠っている墓地に埋葬し、一部の文人たちは、彼を哀悼する文章を書き、それをお墓の碑石に刻んであげた。彼は結局、死後、卑賤な身分から脱し、皆から尊敬される蔵書家、そして文人の友になったわけである。これは、伝統時代に人々が書籍の保有に対して持っていた態度を示すエピソードである。

東アジアの現代社会は、伝統時代と完全には断絶されていない。物質的・制度的には完全に断絶されているように見なされがちだが、伝統時代の観念は、依然として我々の生活の中でその生命力を旺盛に維持している。デジタル時代が花を咲かせる最中においても、書籍に対する格別な思い、読書人に対する敬畏等々は、現代人の思考体系の底に連綿と流れている。だから、デジタル時代に入っても、その技術が浸透し難い分野では紙の本が権威を維持する可能性が高い。しかし、全体的に見ると、デジタル技術が量的な側面で伝統的な出版方式を圧倒する可能性をどうしても否認しない。もはや出版人たちもその技術を理解し、活用せざるを得ない状況に置かれているといえよう。デジタル技術と伝統的な出版方式をどのように共存させ、組み合わせるかという問題こそ、デジタル時代における出版人たちに与えられた宿題ではないだろうか。

**徐敬浩 (Seo Kyung Ho)**

ソウル大学校で中国語文学を専攻、同大学院を卒業。香港中文大学、台湾国立師範大学で研究に従事したのち、アメリカのハーバード大学でPh. D.を取得した。全北大学校とソウル大学校の中国語文学科の教授をへて、2009年からソウル大学校自由専攻学部教授を務める。ソウル大学校人文大学教務部学長、ソウル大学校・奎章閣韓国学研究院運営委員、ソウル大学校博物館運営委員、ソウル大学校中央図書館長などを歴任した。韓国中国語文学会長とユネスコ韓国委員会情報コミュニケーション分科委員会の副委員長として活動しており、2003年からはユネスコ世界記憶遺産国際諮問委員会の委員を務めている。著書に『山海經研究』（ソウル大学校出版部、1996年）、『中国文学の発生とその変化の軌跡』（文学と知性社、2003年）、『中国小説史』（ソウル大学校出版部、2004年）、小説『ジャマイカ』（イック、2010年）など多数の著作がある。